法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

人類学としての服装文化研究 : 物質文化論の方向

小西, 正捷

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編
(巻 / Volume)
20
(開始ページ / Start Page)
65
(終了ページ / End Page)
81
(発行年 / Year)
1974-12-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005197

Hosei University Repository

人類学としての服装文化研究

――物質文化論の方向――

小西正捷

I　人類学の前提

われわれは、われわれ自身の集団についてよく見知っていると思っている。少なくとも、われわれの共有している生活様式のすべては、われわれにとってあらためてとりたてることもないほど身近かなものとなっている。しかしいったんわれわれが、「われわれ」ではない存在、すなわち「彼ら」なるものに出合うとき、そこに瞬間的な「比較」が行なわれる。そこでわれわれのただちにみとるものは、ふつう、われわれと共通のものよりも、むしろ数々の相異である。それはしばしばわれわれにとって新奇なものであり、違和感をもたらすものであった。しかもわれわれは、

Hosei University Repository

しどく好奇心に富んでいる。われわれは、「われわれ」と異なった人びとの集団に対しての旺盛な好奇心を隠しておくことができない。

このわれわれを「われわれ」とし、彼らを「彼ら」とするものが文化であった。その基礎となっているものは、それぞれの集団を構成するメンバーに、必ずしも意識されないほど身近かな生活様式である。それは、「一定地域において歴史的・後天的に形成され、特定集団のメンバーにより共有・継承されるべきもの」（C・クラックホーン）である。ここに「彼ら」と「われわれ」を分ける自・他の意識が生まれ、人はことさらにその相異——自・他における独自性を強調して、自らと異なった人びとに対する好奇心をかりたててきた。しかしその独自性とは、いうまでもなく各文化における特異性に他ならないのだが、われわれはしばしばそれに気がつかない。われわれのがあたりまえで、それと異なった人びとの「独自性」は、えてして奇妙なものとしかうつらないのである。さらにそれは、しばしば優劣という縦の関係に置かれがちとなった。この性向はギリシア＝ローマよりもはるか以前からみられるが、とくに十六世紀以降、いわゆる「大航海時代」の展開ともあいまって、これまで見聞きしたことすらなかった人びとの生活をまのあたりにするにおよんだヨーロッパ人たちは、これらの人びとを「人間」とみなしてよいのだろうかという議論を、大まじめにくりひろげていたのである。

いうまでもなく人類学は、「われわれ」をも「彼ら」とし、優劣その他の価値観を脱して、各文化における、いわゆる「価値の相対化」（石田英一郎）を成就したときにはじめて科学的な歩みをとりはじめるのであるが、「異文化間の比較検討」という作業を広義の人類学の萌芽とするならば、われわれはそれを、まさにこの「大航海時代」にみなければならないのは皮肉である。しかし、この「価値の相対化」こそが、広く人類を総体的に把握しようとする人類学の、欠くことのできない学的前提条件であり、これを前提としてはじめて、人類学は発展してきた。それのみな

Hosei University Repository

らず、ある意味でこの前提こそが、人類学研究の萌芽期をふくめて、この学的分野の到達した大きな成果であったといえるだろう。

しかし、それが明確にされるまでには長い時間がかかった。大航海時代の新しい見聞によるショックからさめて、より客観的にそのあるがままを記述し、さまざまな文化が比較研究されるようになって人類学がその基礎をかためたのは、十九世紀も後半に入ってのことであったし、しかも一般的には、われわれ自身、かの単純な「奇異の眼」を現在すてきれているとは到底いいえない。われわれの日常生活の意識の奥では、いまだに「よそ者即奇妙な存在」という図式が深い根をはっているのである。このことは、英語やフランス語の、stranger-strange, étranger-étrangeなどの語にもかいまみることができよう。とくに異文化と出合ったときに、ただちにそこに意識される異質性・特異性は、数ある文化要素の中でも、外面的（explicit ——もしくは'etic'）な表徴をとる部分——とりわけ、いわゆる「物質文化」とよばれる部分において意識されるものであった。

II「物質文化」論の展開

初期の人類学研究においては、とくに各氏族の文化をできるかぎり網羅的に記述すべき「民族誌」において、「物質文化」の範疇にふくみうる文化要素の項目が、その大きな部分を占めていたことは示唆的である。そもそも初期の段階にあっては、「民族誌」ethnographyの語自体が、今日でいう、自然人類学に対する文化人類学そのものを意味していたように思われる。人類学研究の長い歴史をもつ大英帝国＝アイルランド王立人類学協会は、人類学的調査・研究の手引きとして、一八四三年以来『人類学の覚書と質疑（ノーツ　クイアリーズ）』[1]を刊行してきたが、同書の第三版（一八九九年）に

Hosei University Repository

いたるまで、同書は「人類誌」と「民族誌」の二部だてとなっていることからも、上の事情はうかがわれよう。

同書は版を重ねて、やがて一九五一年に第六版が刊行されるが、その内容は、版を重ねるごとに大巾に改訂されている。その改訂内容をたどると、そこには時代の変化にともなう人類学の学説史的変遷が影をおとしているのをみることができる。ここで、今日われわれのいう「物質文化」の関連項目に焦点をあてて、各改版を簡単に追ってみたい。

今日「物質文化」の範疇にふくまれる、食物関係（たとえばその獲得、保存、調理など）の諸道具や技術、また住居や衣服、さまざまな工芸などは、さらに細かく分類され、それぞれ別個の文化要素として、「民族誌」の名のもとに項目別にならべられているのが第一―三版（一八四三―一八九九年）の現状である。それが第四版（一九一二年）になると、関連項目は「技術」という大項目にまとめられる。これは、のちにアメリカなどで、文化を綜合的にとらえるさいの四本の柱の一つである「技術の文化」という概念の、一つの萌芽とみることもできよう。次いで第五版（一九二九年）となると、はじめて「物質文化」という項目が立てられる。この‘material culture’という語が用いられたのは、もろちんこの時点がはじめてではないが、この版でこの語が用いられたことは、人類学におけるこの概念が、このころまでには十分に確立していたことをあらわす一つの証跡となるだろう。ところが第六版（一九五一年）になると、イギリスにおける「社会人類学」的学風の確立ともあいまって、「物質文化」は、「野外考古学」とともに、アメリカでいう「文化人類学」の範疇から切りはなされ、独立したパートとして立てられるようになる。

以上から読みとれる概要はこうである。そもそも物質文化は、異文化と接するさいに最も目につきやすいものであり、はっきりと手にとり、目で認識することができるものであったために、初期の人類学的研究においては中心をしめるテーマであった。各民族の文化要素を詳細に記録すべき「民族誌」において、物質文化に主要な視点がおかれたのは、この意味で当然なことである。さらに初期の人類学――というより「民族学」とよぶべきだろう――がやがて一

Hosei University Repository

定の理論をもつようになると、いわゆる「進化主義」や「伝播主義」、もしくは「文化圏説」や「文化領域論」などにおいても、「民族誌」に記された物質文化の数々は、その格好の資料となるにいたった。しかし、特定文化の物質文化的要素は、ときに理論のための材料とされ、しばしばそれは本来の文化的文脈、もしくは「生活」から切りはなされて、えてして壮大な文化理論の構築のための道具としての意味しかもたされなかった。ここに、のちの物質文化研究の挫折はすでに用意されていたといえる。これらのいわばグランドセオリーの凋落にともなって、物質文化研究が全く人気のなくなってしまった大きな理由は、この点にもみることができよう。

むろん一般的にいうならば、大給近達氏もいうように(2)、即物的な技術や造型上の視点から考察されがちな物質文化研究は、文化の中における人間の生活と物質文化との有機的な関連に欠けるうらみがあり、研究の体系が本質的に孤立しがちのものであった、ということになる。

しかし物質文化そのものは、いわば人類の生活に不可欠の衣・食・住に本質的にかかわる基本的文化要素であり、この文化の根元を等閑にふしては、文化の何たるかを掘り下げることはかなわないのではないだろうか。この点に関して前出の大給論文は、巨視的視点から、抽象的ではあるが物質文化研究をあらためて人類学の範疇に位置づけ、その方向性をさし示そうとしたものとして注目すべきであるが、より具体的な提言にはあまり出合えないのが残念である。一方では、たとえば最近でも、『物質文化』誌において物質文化研究の方法論をさぐる二回の特集（二〇、二一号）が企てられたが、その「同人言」(3)には、民俗学では「民具」とよばれ、民族学ではかつては「土俗品」とよばれ、考古学では「遺物」「伝世品」などとよばれる、「物」を媒介とする生活史的復原が必要である、とされているにもかかわらず、諸分野における既存の方法論を有効に統合して、新たな「生活史的復原」、もしくは総体的な文化の把握をめざすに実効ある方向が具体的に打ちだされたとは、残念ながらいいきれない。すなわちほとんどの論考は、

Hosei University Repository

広義ではあれ、いずれも「用具」や「遺物」、「伝世品」研究の範疇における論の展開におわってしまっているように思われるのである。

すでに一九五八年に、岡正雄氏は、「民具はまず『技術文化』として、さらに『生活文化』として社会的・機能的に捉えなければならないし、また『技術文化』としてその歴史的発達やその系統、伝播の跡を明らかにしなければならない」といっておられる。(4) われわれはこれを、どのように具現せねばならないであろうか。

いわば「人類学」という広い文脈のうちに、物質文化研究の方向をどのようにみいだしうるかに同様の関心をもつ筆者は、問題により具体性をもたせるために、物質文化のうちでも衣服・服装の問題に限定して、簡単な研究史的な回顧をまじえながら、ある種の展望をみいだしたいと思う。ただしここでは、衣服研究の研究史を本格的に試みようとするものではない。それは到底数ページの記述で収まるはずのものではないし、またかかる作業は筆者の任にたえうるところでもない。また、衣服研究と密接にかかわる「有職故実」やいわゆる「風俗史」の問題も、人類学としての、という文脈からはずれると判断するため、ここではふれないことをお断りしておく。

Ⅲ　衣服研究の萌芽と前提

さて、前述のように、物質文化の中でも最もアパレントなものである衣服は、それを着ない場合もふくめて、ただちに初期――のみならず、今日においてさえ――の異文化に接した人びとの目をとらえることとなった。しかしそれは、えてして調査者・記録者にとって奇妙なものであり、それを記録することによって、無意識的ではあれ、自らの優越を確認する結果となることもしばしばであった。人類学の前提とされた「文化的価値の相対化」は、ここでも衣

Hosei University Repository

服研究の前提とされねばならない。そのためには、われわれは、いわゆるわれわれの「常識」なるものを捨てねばならないのである。

たしかにわれわれは、われわれ自身、ある一定文化を共有する集団のメンバーであり、この文化における独自の「準拠体系」の規制をうけている。衣服に則していえば、とくに日本のように四季のうつりかわりのはっきりしているところでは、衣服に関する意識が発達しており、さらにそこに複雑な社会的慣習などがからまって、いわゆる「服装のTPO」に対しては、かなりの意識を働かさざるをえない。それを逸脱すると、常識がないといわれたり、「白い眼」をむかれて無言の制裁をうけるだろう。人がある特定の文化に属するかぎり、彼はその独自の準拠体系によらねばならない。こうして、ある文化の準拠体系は、その文化を共有するメンバーを裁可する側面をもつのである。しかしそれは、本質的にはある特定文化における規制＝裁可を機能するのみのものであって、われわれは、他の文化にはそれなりの、独自の準拠体系の存在することを認めねばならない。そして、その文化を総体的にとらえた際の構造にあっては、衣服たりといえども他の文化要素――社会構造や宗教組織、世界観や価値観などから、切りはなすことはできないことを銘記すべきである。すなわちある特定社会において、さまざまな文化要素が、いかに複雑な形においてではあれ、全体的な枠組ないしは構造のもとにからみあっているのかを明らかにしなければ、たとえば衣服の形や着方の意味が明確にならないのである。それが明らかになってはじめて、ある服装の、その文化における合理性をわれわれは理解しうるにいたるのであって、それをただわれわれの「常識」でもって判断しても、それ自体何の意味あるものとはならない。われわれにとっていかにある服装が奇とうつろうとも、彼らにとってのその意味をさぐろうとするとき、そこに新しい服装文化論が展開するのである。

しかし、衣服が特定文化の文化要素として認識され、こうしてより客観的な人類学的研究がその歩みをはじめてさ

Hosei University Repository

えも、この衣服という特定の文化要素が正しくとらえられていたとは必ずしもいえない。まず初期の「進化主義」の立場をかいまみよう。

いうまでもないが、ダーウィンの進化論は十九世紀後半のヨーロッパに強い衝撃を与えた。ダーウィンは、その意とするところはしらず、ヒトの起源はみるもおぞましいサルと祖を共にし（それはヒトの祖先がサルであったことを必ずしも意味しない）、さらにさかのぼれば、アミーバなどにも行きついてしまうという進化論を発表し、ヒトはアダムとイブの、ひいては心正しいノアの子孫であるという神話を打ち破って、科学を宗教から解放したといわれる。それに刺激されて、同様に文化のあらゆる要素や、宗教・社会・法律・政治・経済その他一切の人間の行動もまた、単純から複雑へ、換言すれば低級から高級（?）へと、すべて一様に一線的進化をたどるものとする諸説が次々とだされていったのである。こうした「文化（社会）進化論」の背景には、自らを人類史における進歩（!）の頂点として位置づけた、当時のヨーロッパの状況があるとは、今日すでに指摘されているところである。

さて、文化の「進化」をさぐることは、あるものの起源をさぐり、その発展＝進歩のあとを人類史上に跡づけることに他ならなかった。いわばその視点は、広く人類レベルにおける通時的方向性を必然的にもつものであったといえる。衣服を問題にするさいにも、一つの大きな問題は、その起源を人類レベルで単一に求め、直線的な進化をたどろうとすることにあった。

この「科学的」な進化論に支えられて、人類の最初の衣服は、もはや楽園を追われたアダムとイヴのイチヂクの葉であるなどとは信じなくなった人びとは、その起源をさまざまなものに求めた。たとえば人間の本来的な装飾の欲求にその起源を求めるものや、天候の影響、また傷害からの防禦の要求に求めるもの、また多少とも装飾の問題とも関係してくるが、呪術や社会的起源説もある。(5) 中でも、「性的羞恥心起源説」が大きく浮び上った議論であったのは、

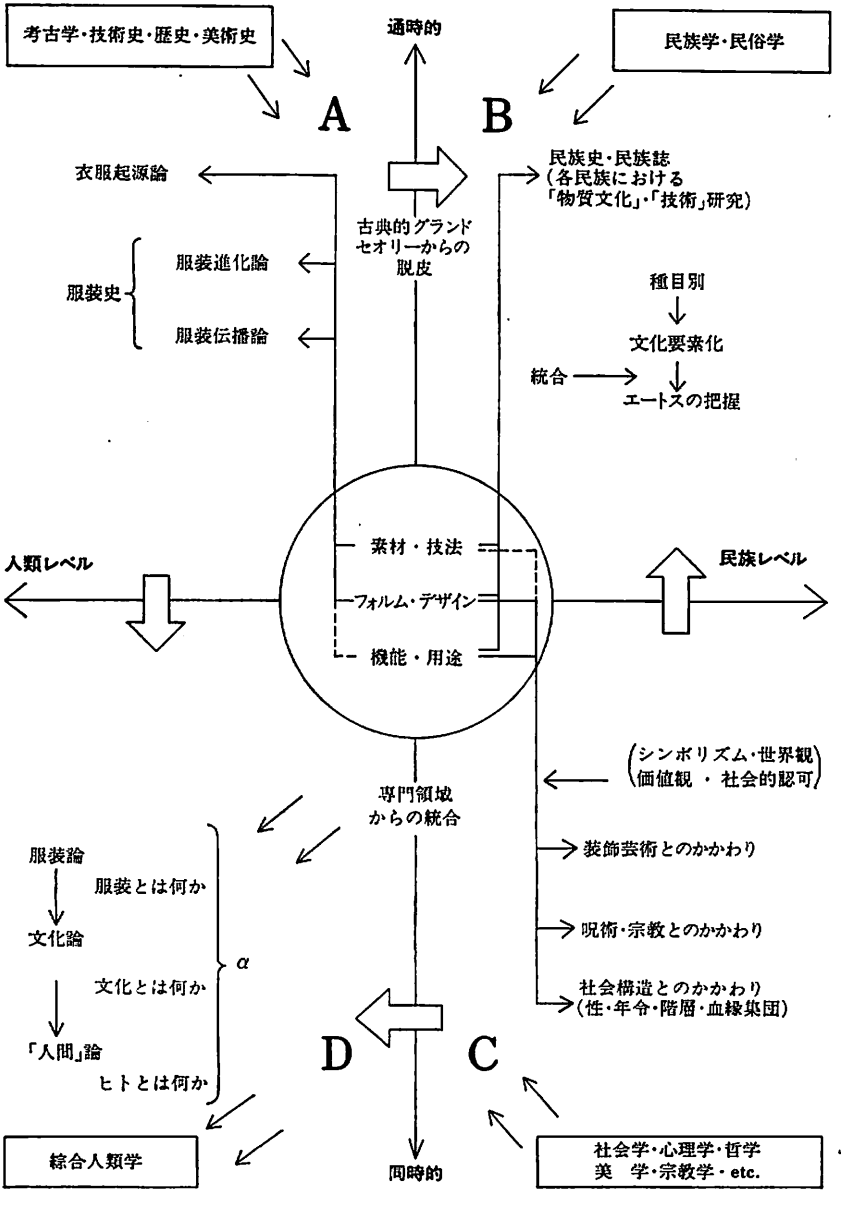
Hosei University Repository

ある意味で、イチヂクの葉のシッポをいまだ残していて興味深い。たしかに、少なくとも婦女子の場合では、装身具をも付けない全裸のケースはないといえるが、それがすべて年少者や男子をもふくめて、性的羞恥心に発するものかどうか、結論はえられない。またこれは社会心理学的な面ともかかわってくるが、羞恥心の構造は各民族によって異なるのである。たとえば、陰部を露出して何らはばからぬ人びとにわれわれは侮蔑の眼を向けるだろうが、一方彼らは、「人前で口を覆わぬ」われわれに赤面するかもしれない。

ともかく、たとえばこうした起源の問題を考える上でも、さまざまな民族のレベルにおいて、かつ他の文化要素との関連においても考えねばならない点が多い。そこで、やがてこうした問題は、ただちに人類レベルで事を推しはかるのでなく、のちに今一度各民族のレベルに戻して、その独自の装飾芸術や呪術・宗教・社会、またさまざまな価値観・世界観等の諸概念とのかかわりにおいて、再検討されるようになってくる。しかし、いまだ進化論者たちの視点は歴史的・通時的観点の範疇にとどまり、衣服の起源のみならず、その発展も、なおすべての人類にとっての一元的・直線的な進化という観点――それは進歩史観と無関係ではない――からのみの検討において、つづけられたのであった。

やがてそれに対し、衣服をふくめての文化の起源や発展を、多元的・地域的にとらえようとする伝播論が打ちだされてくるにいたる。しかしそれは、多少とも古典的進化論よりもキメの細かさを意図したものであったとはいえ、たとえば「文化圏」や「文化層」などの概念を用いて、あまりに性急な人類史を一挙に構築しようとする無理のあったことを指摘せざるをえない。「文化圏」、「文化層」の概念そのものは、今日でも必ずしも無視しきれない、なお有効なものをもっているとも思われるが[6]、ある特定文化における、たとえば衣服が、その文化構造もしくは準拠体系の中でどのように機能し、位置づけられているのかを、より精緻に検証することの必要性が、やがて主張されてきたの

Hosei University Repository



Hosei University Repository

である。

Ⅳ　衣服研究もしくは服装文化研究の方向

前節で、いわばすでに今日批判が出つくしているともいえる二つの大きな古典的理論の流れをあらためて追ったのは、この批判こそが、今後の衣服研究をすすめる上での不可欠な前提となるものであることを確認するためであった。いわずもがなのことであれば、むしろ喜ばしいことである。

さてその後のさまざまな方向は、必ずしも学説史的には追うことができない。その一つ一つが、多様な学派によっていまだ意味をもちつづけているからである。したがってここでは、その方向を大まかに把握し、むしろ今後の問題をさぐる系口としたいと考える。

まず第一に問題となるのは、衣服そのものにあたり、衣服そのものを具体的に研究しようとするものである。そもそも衣服が研究対象とされるときに問題となるのは、その製作過程（素材・技法）と製品（フォルム・デザイン）、そして着方・着け方をふくめてのその意味（社会＝宗教的機能、用途、等々）の三つのレベルにわたるはずであるが（付図中心部の円内参照）、ここでは最も基本的な、素材・技法やフォルム・デザインそのものを対象とするのである。

これは、衣服研究における最も基本的な作業である、資料の調査・観察・記録・収集という形でまず行なわれ、これまでの「民具研究」が最もそのエネルギーを投入してきた作業でもあった。いわばこれは、文化人類学的研究における民族誌的役割を果すものであって、最も精密かつ正確におさえられねばならぬ重要な作業である。

Hosei University Repository

永年にわたって民俗資料研究をつづけてこられた宮本常一氏は、「民具学」を提唱して、次の三点を研究の前提としてあげられた[7]。この「民具」の語を「衣服」とよみかえれば、そのままこれは衣服研究にとって貴重な提言となる。すなわち、「㈠民具はまず全般的に集めてみること。㈡さらに一地域または一戸一戸の民具を徹底的に集めるなり、調査研究してみること。㈢一つの民具の分布・名称・素材・製作・形態・流通・使用法・耐用年数・変化・他の民具との関係・民具と環境などを調査研究することによって、その存在の意義と法則を発見してゆかねばならない」という。この第三の点からも明らかなように、㈠と㈡があってはじめて問題の発展が可能なのであって、㈢にみられるように、そこからみちびきだされるさまざまな問題は無限ともいえるのである。

しかし、前にも多少ふれたが、古典的グランドセオリーともいうべき進化論・伝播論（図におけるA領域）は、理論が先にたって、このような着実な手つづきをはぶいてしまう傾向にあったといえる。これらの研究にあっては、主として人類史の構築こそが主目的であった。

一方それに対し、問題を各民族レベルに移して、扱うものも単なる製作過程や製品、すなわち衣服そのもの（狭義の衣服研究）からさらにひろげ、その研究対象に装身具や髪形、身体装飾などをふくめて、それぞれの意味や機能を検討しようとする服装（ないしは服飾）文化研究が姿をあらわす。しかし、この研究の方向は、さらに二つに大きく分かれるものとしてとらえることができよう。すなわち図示するように、一つは、従来のA領域と基本的には変わらない通時的（歴史的）思考の枠内にありながらも、人類史ならぬ民族史を復元する資料としようとする方向性（これをB領域と名づける）であり、もう一つは、むしろ時間的要因をほとんど考慮せずに、ある特定文化における諸文化要素の機能的構造を明らかにしようとするものであって、いわば衣服ならその意味や機能を明らかにすることを一層前面に出したもの（C領域）である。

Hosei University Repository

ただし、C領域においてさえも、時間的要因を全く切りすててしまうことのできない問題が本質的に内包されている。すなわち、そもそも文化が動態であるならば、この領域でかかわってくるさまざまな問題も動態的にとらえられねばならず、こうした文化の受容や変容の面を積極的にとらえようとする、いわばBとC領域をつなぐような方法論も、一方では当然ながら問題にされてよいのである。

さて、端的にいうならば、B領域はある意味でドイツなどを中心に発達した古典的な歴史民族学の直系的発展としてあり、C領域はむしろA—Bの学的伝統を断ち切った形で、「機能主義」以来のイギリス社会人類学や、フランスの構造人類学などで展開しつつあるものである。ただしB・Cともに、Aの古典的グランドセオリーが、ともすれば衣服なら衣服の機能や用途に細かい関心をもたなかったのに対し、その衣服の使用法や使用者、また社会＝宗教的裁可や、色・デザインに対するシンボリズム等の機能・用途に、大きな関心をむけていることは注目してよいだろう。この点で服装研究は、とくに社会学などの隣接分野に大巾に接近したといってよい。[8] 一方ではそのかわりに、CではA・B（とくに伝播論や民族史、もしくはその基礎となる民族誌的基礎作業において）ほどには、衣服の素材やその製作技術に無関心となりがちになってしまった。Cのような方法論が、しばしば歴史やものを軽視していると批判されるのはこうした点においてである。

しかし今日、人類学において広義の衣服研究とでもいえるものが最も活発にすすめられているのは、Cにおける諸問題である。すなわちアフリカやニューギニアなどでは、さまざまな部族社会における根元的な諸問題の追求が、広い視野においてなされつつある。

一方Bにあっても、衣服を単なる「物質文化」研究の一環としてではなく、Cの影響を大きくうけて、個々の種目別研究にとどまらず、それを特定文化の構造中に特異な文化要素として位置づけようとしている様子もみうけられる。

Hosei University Repository

やがてはそれは、その文化総体のもつエートスを明らかにしようとするところにまで展開するものでなくてはなるまい。こうしてはじめて、衣服研究は、ともすればおちいりがちであった単なる収集や物いじりに終らぬ、ダイナミックな文化論に発展していく可能性をもつといえよう。

しかしまた他方では、A領域にみられるような古典的グランドセオリーは批判されたとはいえ、本来人類学のめざすものは、別個の学的領域を越えて広く文化そのものを、ひいては人類を総体として把握することにあるはずであり、時としてうつろわぬ、文化の、人類の本質を明らかにしようとせねばならぬことはいうまでもない。同様の意味において、衣服・服装文化研究も、図にD領域として示したように、そもそも「衣服」とは、「服装」とは何であったのかという本質論を、この文脈で試みることがあらためて必要となってくるだろう。ともすれば古典的、悪くいえば古くさい分野とみなされがちの物質文化研究は、こうして文字通り新しい衣装をまとった服装文化研究として、新たな発展をたどることになるであろうと思われる。

だがそれは、たとえばA領域に示したようなグランドセオリーや、初期のB領域においてままみられた研究のように、再び資料をその本来の文化的文脈から切りはなして単なる「物」と化してしまったり、また特定理論もしくは理念のための道具としてしまうことはゆるされない。Dで追求される、いわば何のための研究かということをふまえ、またBで明らかにされるべきエートスの何たるかを視点にすえた上で、Cがともすればおちいりがちであった極端な専門化の袋小路にはまることなく、われわれは再び、研究の原点である資料そのものに則した研究を、地道に追求していく必要があるように考える。

むろんそれは、いわゆる「博物館的」発想に基づいた単なる「物」の収集や、きれぎれの情報のファイル保存を意味するわけでは断じてない。精密な民族誌を欠く人類学的研究がありえないことはいうまでもないが、理論や視点を

Hosei University Repository

欠いた民族誌も存在しえないのである。この意味でわれわれは、先にも引用した宮本氏の提言に、二たび、三たび戻らねばなるまい。こうして資料をして語らしめうるさまざまな問題の可能性を、われわれはさらに追求していく必要があるだろう。

先にもふれたように、いわゆる物質文化研究、ましてこのようなものに直接則した問題は、今日必ずしも魅力的な研究テーマとはうけとられていない。しかしこの古くて新しい研究領域は、現在のような「不人気」ゆえにこそ、ますます重要とされねばならないといえるのではなかろうか。(9)

筆者が右に示しえたものは、あくまでも一般的な「方向」に終ってしまい、残念ながらその具体的な方法論は、ここでもまた必ずしも提示することができなかった。しかし、この方向における衣服研究もしくは服装文化研究、ひいては物質文化研究のための諸前提は、今さらいうまでもないことであるが、再び確認しておいてよいことのように思われるのである。(10)

Hosei University Repository

註

(1) A Committee of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, *Notes and Queries on Anthropology*. なお、同書の初期の諸版の概要に関しては、石田・泉・曽野・寺田『人類学』、東大出版会、一九六一年（一〇六頁）による。

(2) 大給近達「物質文化研究の方法論的考察」『日本民族学会第十二回研究大会発表要旨』二〇―二二頁。一九七三年。

(3) 『物質文化』、二〇号、五四頁、一九七二年。物質文化研究会。

(4) 岡正雄「民具について」、日本常民文化研究所編『日本の民具』（角川書店、一九五八年）所収。〈中村たかを編『民具』、現代のエスプリ八四号、一九七四年に再録。〉

(5) これらの議論は、進化主義者によるものではないが、シュミット／コッパース『民族と文化』（大野俊一訳、河出書房新社、一九七〇年、下巻九二―九九頁）にもみられる。

(6) ホーベルは、いわゆる「文化圏説」は一九四〇年ころを最後に、人類学の理論や方法の発展にはほとんど影響を残さずに第二次大戦とともに消滅したとのべているが（E. A. Hoebel, *Anthropology*, New York, 1966, P. 518.）、これはいいすぎであろう。北原真知子・永田脩一「歴史民族学現今の動向」、『民族学研究』二三巻、一九五九年。大林太良「歴史民族学の現状と課題」、『東洋文化研究所紀要』二〇、一九六〇年。大林太良・山田隆治「歴史民族学」、『日本民族学の回顧と展望』、一九六四年、他参照。

(7) 宮本常一「民具学提唱」、近畿民俗学会編『沢田四郎博士記念民族学論叢』、一九七二年所収。〈中村たかを編『民具』（前掲）に再録。〉

(8) 『被服文化』誌（のちに『服装文化』と改題）の一二七号（一九七一年）以来、一四四号（一九七四年）まで四年間一八回にわたって連載された荻村昭典氏「服装社会学入門」は、服装文化研究に、人類学や心理学ともかかわる新しい視点を導入した。

Hosei University Repository

社会学からの発言としても、参考とすべき論文であるといえよう。

(9) 現にこうした視点から二―三の新しい方向性をもった具体的な提言が石毛直道氏などからもなされている（「物質文化とフィールドワーク」、梅棹忠夫編『人類学のすすめ』筑摩書房、一九七四年所収）。この中には、衣服（ないしは服装文化）研究に直接かかわる問題もみられ、示唆されるところが大きい。ただし、衣服の名称体系からみちびき出される議論は、民族が「意味世界」をどのように言語というサインによって切るかという、一定民族の「範疇化」作業を通じての価値判断の問題であって、それはいわば民族の文化認識方法ないしは価値概念体系、ひいては広義の世界観の問題でもあるといえる。氏のいう「民族分類学」の命名は、誤解をまねくおそれがあろう。

(10) 本稿の母体となった草稿は、かつて『服装文化』誌の要請によって成った一〇枚程度のきわめて短いものであるが、同誌一四〇号（一九七三年）に掲載されたものは、もとの草稿のさらに五分の一程度しか跡をとどめず、あとは編集者による、事実にも反する加筆が多々なされたものであったために、次号（一四一号）で編集部告によって同小論を完全削除せしめた。本稿はそれにかわるものとして、このたび全面的に手を加え、現在の形に書き下しなおしたものである。